高倉 健さん
「遥かなる山の呼び声」に思う

土田 良吉

平成二十六年十一月十日の午前三時…
男の中の男「名優の健さん」が八十三才でこの世を去った。それからすでに四年の月日が流れた。
私のふるさと北海道をロケ地にした名画、「黄色いハンカチ」「鉄道員」など等、道産子には親しみのある俳優さんでした。無口なところは、「新人の同僚やファンから突然話し掛けられても、どう返事していいのか、つい黙ってしまいがち」とよく話していたらしい。あの渋さ、反面、銀幕での姿とは違う人間味を感じさせる温かい人柄は多くの人の心を捉えて離さなかった。私もその一人である。北海道の根室原野が性に合っていたのか、忘れられないのは、道内の中標津(なかしべつ)をロケ地にした山田洋次監督、高倉健・倍賞千恵子主演の名画「遥かなる山の呼び声」である。
五十年前の昭和五十四年夏、ふるさと中標津の国鉄上武佐駅でのロケを思い出す。駅前の日通営業所の前で所長に、田島耕作（健さん）の兄・俊一郎（鈴木瑞穂）が尋ねるシーンで
「この辺りに食堂はないのかネ」と「食堂はないが向いの旅館なら用意しますよ」と所長が指をさした。それが、私の旧家で母が守っていた。一瞬だが建物が映った。今でも傍にロケを記念した大きな看板がのこっている。仕事の都合で我が家の前のロケを見落としたのは残念でならない。
主役の耕作は、二年前に妻が高利の金を借り、其れを苦にして自殺。その通夜の席で妻を悪し様に言う高利貸を殴り殺して逃走した。原野の真っ只中にある牧場にひっそりと暮らす母子家庭、民子（倍賞千恵子）と武志の家に一夜の宿を求め、納屋に泊めて貰う。
兄の俊一郎は、耕作が起こした殺人事件がもとで教職を追われていた。ここ上武佐駅で耕作に会う約束で訪ねて来たのだった。缶コーヒーを前科者の耕作に与える。行く末を心配する兄に向かって耕作は
「如何しても此の地で暮らしたい」と語る。列車が通り過ぎ、耕作は線路の上を、バッグを肩に、とぼとぼと歩いて行く。その夜、兄のくれたコーヒーを民子と飲みながら「ここに留まってもいい」と胸の

内を明かす。過去を一切語ろうとしない耕作に、不気味さを感じていた民子だったが、ひとり息子の武志（吉岡秀隆）はすぐに耕作に懐いた。

その年の八月、中標津観光祭のシーンではスーパーの前で背の高い耕作が、子役の武志少年を肩車に、民子と龍の舞や千人踊りのパレードを楽しんだ。秋の草競馬では耕作は民子の持ち馬ユカ号で出場、スタートではシンガリだったが耕作の見事な手綱さばきで、一着でゴールに突っ込んだ。民子の心は！！

この時、耕作を追う刑事の鋭い目があった。

朝まで徹夜で牛の看病を続けていた耕作は家の前に止まったパトカーへ向かって自から歩いて行く。武志少年が、「おじさーん」と呼びながら追う、オイオイと泣きじゃくるシーンはアメリカ映画「シェーン」の日本版。

四年の刑を言い渡された耕作が網走に向かうロケは翌年の冬の二月。弟子屈駅を出た列車に、民子に横恋慕した虻田（ハナ肇）の計らいで心を開いた民子が乗りこみ刑事や耕作のすぐ傍にすわる。虻田は民子の身の上を耕作に聞えるように大声で話す。刑事に囲まれながら耕作は涙をこらえる。民子も堪りかねて耕作にそっとハンカチを渡す。手錠のままの耕作が、苦りきった顔の大きな目玉にハンカチをあてる。夕焼けに染まった雄大な雪原を列車が行く。

ＴＨＥ・ＥＮＤ！

ロケ総勢六十名。五十四年七月から九月まで町内の養老牛温泉「藤や」に分宿。「藤や」には通算五件ものロケ隊が泊まっており全国でも僻地にしては之だけの実績は珍しい。

「高倉健逝く」のニュースが流れるやマスコミ各社から電話が殺到したという。

実は昨年の平成三十年四月のこと、友人から「遥かなる山の呼び声」のリメイク版が只今中標津でロケ中だと知らせがあった。山田洋次原作、監督は朝原雄三、主演の耕作役は阿部寛、民子役は常盤貴子さん。あれから三十八年も経っているのに名作のリメイクは珍しい。十一月頃ＮＨＫ・ＢＳでスペシャルドラマとして放送の予定との事であった。

酪農郷・中標津は前とは比べものにならないほど近代化し大規模になった。殆どの農家は牛の数が百頭を超え、牛達が肩にぶら下げているセンサーでデーターが送りこまれ歩数や発情期までわかるまでに

なった。
国鉄は廃線になり上武佐駅もない。初演の時とのさま変わりの中で「愛の物語」がどうリメイクされるのだろう。興味津々だった。
昨年の平成三十年十一月二十四日、予定どおりBS一〇三で初放送された。見どころが多く視聴率は予想を大きく上回ったという。
国鉄が無くなったので耕作と兄との出会いのシーンはない。替わって民子の亡夫の父吉雄が登場する。耕作はバイクで逃走中だった。嵐の夜、バイクの故障で立ち往生している耕作を吉雄は親切に家に泊める。いい男だと民子に言い聞かせるが突然現れた大男に民子は驚く。ここからがシーンの始まり。無心で手伝う耕作に民子は次第に心を開く。背の高い耕作の心の側から滲み出る色気！うち解けた民子の笑顔！！そして耕作の自首、自らパトカーに乗る。見送る民子一家。そこには芽生えかかた家族の絆さえ感じる。二年が経って横浜での裁判、耕作に懲役五年の判決が下る。義父の吉雄が亡くなり、民子と虻田が傍聴席で耳をそばだてる。虻田が、被告席の耕作に聞えるように職員の止めるのをおし退けて大声で叫ぶ。
「…耕作兄貴、真面目に努めれば二年で帰れるぞ！男になれる。民子さんが待ってる…」
耕作は大きな目を向け軽くうなずく。民子は目にハンカチを当てたまま…。
中標津の広い牧野と牛の群れ、地球が丸く見える空港から十五キロほどの標高二百七十㍍の開陽台が画面一杯に映し出された。
撮影を振り返って山田監督は「自分のよりよく作られたら困るし、悪ければなお厭だ」とコメントしているが、朝原監督は新しい感覚でこのラブシーンを見事なほど鮮やかにリメイクした。
撮影後、北海道応援のメッセージの中で、常盤（民子）さんと山田監督の言葉がある。
「冬が終わって春になって黄色いタンポポがわっと咲くと、もう現場に行くのが楽しみで…それが夕方になると萎むのネ。都会で暮らしていると気付かないけどそんなこと発見できて嬉しかった」「牛が可愛くて、おっとりしていて目が寂しそうで」
また山田監督も「そうネ。北海道ってタンポポが多いイイとこなんですよ。自然とそして人も独特なんですネ。この地方に住む人達のおおらかさとでもいうか！だから同じ思いを今常盤さんが言ってくれま

した」

「でも去年の九月の大地震では全道の電気がみな停ってしまって搾乳が出来なくなり本当に困ったことでしょう。乳房炎でみなやられてしまうのですから想像を絶しますネ。心からお見舞い申し上げたいと思いますね。」しみじみと山田監督は語った。

自分は明けて九十四歳。親しみ深いこの映画を、しかもリメイク版にまで出会えるとは冥利に尽きます。列島北の最東端にある大酪農郷が世に公開され多くの方々の目にとまるのは、山田洋次監督・高倉健・倍賞千恵子さん、朝倉雄二監督・阿部寛さんそれに常盤貴子さん有ってのこと。

誠に有難く、徒然に書きなぐりました。

２０１９・１・３（平成三十一年1月3日）